

第9号

2018年
1月発行

CONTENTS

利用者の立場から

京都大学 名誉教授
(日本語の歴史的典籍ネットワーク委員会委員長)

高田 時雄 ①～③

「新日本古典籍総合データベース」の
マルチリンガル化対応のための基礎研究
立命館大学文学部 教授

(研究開発系共同研究)

赤間 亮

立命館大学情報理工学部 教授
(研究開発系共同研究)

前田 亮 ④～⑤

「津軽デジタル風土記の構築」に向けて
弘前大学大学院教育学研究科 教授
(異分野融合共同研究 研究代表者)

瀧本 壽史 ⑥～⑦

「古代の甘味料」あまつら「の復元」
—文と理の知恵の蔓を綯い交せて—
立命館大学立命館グローバルイノベーション
研究機構 助教異分野融合共同研究 研究代表者
神松 幸弘 ⑧～⑨

イベント報告①②

⑩

こんな古典籍があった！

⑪

トピックス ⑫

利用者の立場から

ふみ

「日本語の歴史的典籍の
国際共同研究ネットワーク
構築計画」ニューズレター大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

京都大学 名誉教授

高田 時雄
たかた ときお

(日本語の歴史的典籍ネットワーク委員会委員長)

国文学研究資料館(以下、「国文研」)が中心となつて、二〇一四年度から「日本語の歴史的典籍データベース」の構築が十年計画で進められている。歴史的典籍にかかわる国際共同研究ネットワーク構築計画の一環ということだが、事業の中核となるのがこのデータベース構築であることはいままでもない。写本、刊本をふくめたあらゆる古典籍の原本画像を提供し、さらにテキスト化も視野にいられているということ、この計画に対する期待は大きいものがある。

必ずしも古典籍には限らないが、やや規模の大きな類似の画像データベースとして、すでに国会図書館デジタルコレクションがあり、早稲田大学の古典籍総合データベース、国立公文書館のデジタルアーカイブがある。ほかにも各大学図書館や、公私立図書

館でも、スケールの違いや公開の仕方に違いはあつても、所蔵典籍の画像データベースを公開するところ、近年増え続けている。但し、これらはそれぞれの館蔵品の公開が主眼となつているのに対して、国文研の計画は大学図書館を中心に全国的なデータベース構築を打ち出したところに大きな特色がある。完成のあかつきには、古典籍搜索のポータルサイトとしても機能するはずで、そうなれば便利この上ない。

人文学にとって、文献の搜索は研究の第一歩であるとともに、もつとも多くの時間と労力を浪費するものでもある。しかし本格的な研究はとにかく原典資料の搜訪からはじまると言っても過言ではない。もちろん先行研究を辿ればそれなりの糸口が見出せるだろうが、新たな展開を模索したり、ちよつと外れ

た分野や未開拓の領域に足を踏み入れようとすると、材料を集めるのに一苦勞である。もっぱら搜索の便を考えて、これまで各種の目録や資料案内などが作られてきた。研究者はそういった工具書に頼るところが大きかった。

ところがデータベースというものが登場して以来、様相は一変してしまったようだ。かならずしも図書館に出向かなくとも、極めて鮮明な画像がネット上で提供されるため、資料搜索の労力は大いに軽減されることになった。原典ばかりでなく、二次的な研究論文の類にしても、ネット上で公開されていれば、わざわざ図書館へコピーを取りに行く手間が省ける。もともと研究論文の電子化については、日本はどうかかなり立ち遅れているような気がする。中国では「中国知網」(CNKI)などによってほとんどの雑誌論文の電子テキストがダウンロード出来るし、新しい専門書にしても多くがネットから落とすことができる。有料のものもあれば、無料のものもある。大学でデータベースを一括購入している場合は、もちろん無料である。したがって学生諸君は机の前に坐っているだけで、たいいてい研究資料は揃ってしまふ。これはお国柄ということもあるから、その当否については何とも言えないが、便利なことはいない。ただしこれは古典籍の話ではない。古典籍の公開については、中国はすこぶる物足りない。北京の国家図書館と上海図書館とは、中国国内でもっとも豊富に古典籍を所蔵する図書館だが、それらが無償で公開する仕組みはないように見受けられる。昨年、上海図書館所蔵の善本が一時ネット上で公開されて、ダウンロードも出来たように思ったが、確かめてみたら現在はどう出来なくなっていた。

ちなみに、筆者は中国学の専攻で、国文学にははなはだ縁遠い位置にいる。したがって利用者の立場といっても、日本の古典籍については純粹の研究者の利用とはいえず、ほとんど一般人に近い存在である。とは言っても、日頃データベースを利用する場合には、やはり研究者として利用しているわけで、その経験をふまえて些か氣付いたことや希望などを述べてみたい。

筆者は一九七六年からしばらくヨーロッパにいたので、各国の図書館でいわゆる「漢学」の材料を集めたことがある。「漢学」というのは、日本で中国学というのに近く、さらには特にヨーロッパなど外国の中国研究を指すことが多い。この分野ではコルデイエの『中国書誌』(Bibliotheca Sinica)という古典的大著があり、それにしたがって訪書旅行をしたことを思い出す。そのころはデジタル資料などは存在せず、マイクロフィルムで写真を撮ってもらいしかなかった。そのリールがいまでも何百と棚の上に眠っている。それらのうち幾分かはネット上でフルカラーの精細な画像が公開されていて、むかしの白黒フィルムは不要になった。今後、こういった研究資料の画像データベース化は、年を逐^おって急速に発展していくに違いない。国文研のデータベースも、日本国内だけでなく、外国の日本研究者にとって大いに役立つはずである。その意味では国際的な視点が不可欠になるう。

ヨーロッパの古い図書館の蔵書は自国の古典籍、またその源流であるギリシャ・ローマの古典ばかりでなく、東方世界の典籍も数多く所蔵していて、当然そのなかには中国や日本の古典籍も含まれる。大英図書館やフランス国立図書館はその最たるものである。なかでもフランス国立図書館の「ガリカ」(Gallica)は、筆者が常日

頃お世話になっている大規模データベースで、筆者の専門でもある敦煌遺書の画像がすべてここで公開されているばかりでなく、十九世紀以来のフランス東洋学の著作も網羅されていて、しかも無制限にダウンロードできる。ドイツの図書館は戦争で大きな被害を受けたが、それでもベルリン国立図書館のデジタルコレクション(Digitalisierte Sammlungen)はなかなかの内容で、筆者の最近のお気に入りである。ここもすべてダウンロード可能で、Google ブックスに比べて画像が非常に鮮明であるのが嬉しい。サンフランシスコに拠点を置くインターネット・アーカイブは、あらゆる電子媒体の資料を無償で公開している巨大な閲覧サービスで、そのコンテンツはすさまじい勢いで増加中である。ここにも多くの関連文献がある。ロシアは西ヨーロッパ諸国にくらべて遅れをとっていたが、二〇〇七年にボリス・エリツィン大統領図書館(Президентская Библиотека)という新しい国立図書館の設立が決定され、ロシア史上のあらゆる文献をデジタル化して提供するという事業が開始された。現在、すでにネット上で公開されているものだけでも、中央アジアやシベリアなどに関する文献はすこぶる充実していて、画像の精細度も高い。今後のさらなる発展が楽しみだが、惜しむらくは閲覧だけでダウンロードが出来ない。

以上は筆者が普段利用するデータベースの極く一部に過ぎないが、他にもやや規模の小さいものになると、その数は非常に多く、一々覗きに行くのも骨が折れる。中国学にかぎって言えば、それらの検索を容易にしてくれるポータルサイトとして Bibliotheca Sinica 2.0 というものがあり、甚だ便利である。Bibliotheca Sinica とは、先に紹介したコルディエの書誌だが、ウィーンを拠点とする

このサイトがその名称を踏襲したところに、意気込みが感じられる。事実、すこぶる便利である。上に挙げたデータベースにも中国古典籍が含まれている場合が少なくないが、量的に見劣りするのはいやむを得ない。この方面では本家である中国の奮起を期待せざるを得ない。

さて現在世界で公開されているデータベースの中で、コンテンツを古典籍に特化しているものは非常に稀である。研究者の立場からすれば、これは願ってもないことで、日本に所蔵される典籍がネット上で全面公開される意義は、学術的に見てまことに大きいものがある。公費を用いた事業なのだから、一般人にも広く利用してもらえそうな仕組みが求められているとも聞くが、第一義的には研究者の利用を目指すのがよいと思う。このデータベースを利用した成果を、研究者が一般に向けて発信すれば好いだけのことである。

最後に一つ希望を言えば、日本語の歴史的典籍とはいえ、日本語という枠をあまり厳密に考えず、日本人が漢文で書いた著作や、さらには和刻本の漢籍も是非視野にいれてもらいたい。和刻本漢籍は、上に言及した幾つかのデータベースでは、「シニカ」ではなく、「ジャポニカ」に含めていることが多いのである。実際、返り点のついた和刻本のテキストを、わが先祖たちは日本語として読んでいたのである。また将来中国で古典籍のデータベースが構築されるとしても、和刻本漢籍が入ってくることは考えにくい。これはどうしても日本の責任でやるしかないと思われる。

「新日本古典籍総合データベース」の マルチリンガル化対応のための基礎研究

立命館大学文学部 教授 赤間 亮 あかま りょう
立命館大学情報理工学部 教授 前田 亮 まえだ あきら
(研究開発系共同研究)

「歴史的典籍NW事業」の事業展開の中で、その根幹に位置するのは「新日本古典籍総合データベース」(以下、データベースはDBと表記)である。現在、新・旧のバージョンが併走する形であるが、筆者の経験上、システム開発の上では、新旧の相違を強調したいがために、旧バージョンが培ってきたポリシーを理解せずに欠落させ、本質が欠落したまま機能のみが一人歩きするということも起こりうる。新バージョンの成長と成熟を期待したい。

旧DBに対しては、従来から西暦による検索ができないことに不便を感じていた。和暦では、年単位の検索はできる。しかし、整列ができない。新DBには当然その機能が加えられるものと思っていれば、現状ではどこを探してもその機能がみつからない。これができる、たとえば“分野別出版年表”が即座に表示されるようになるのである。新バージョンはまだ発展途上とのことであるが、是非追加してほしい機能である。

さて、こうした加えるべき機能の一つとして、DBのバイリンガル化がある。この事業自体、海外の大学・研究機関との連携研究を全面に押し出し「国際共同研究ネットワーク構築」が求められてい

るため、重要な課題となっている。このDBは、もともと非常に専門性の高い内容を日本語でのみ記述したものであり、多言語対応が難しい内容のDBとなっている。新バージョンでは、実装されていないようであるが、旧バージョンには、すでに各項目にローマ字入力すると、自動的に平仮名に変換するシステムが導入されていた。これも復活を期待したい。

私たちは「新日本古典籍総合DB」の次期バージョンに取入れられるべき、バイリンガル型DBがどのように実現されるべきなのか、その基盤となる考え方を提案するためにNW事業の研究開発系共同研究として研究を続けてきた。本研究では、二つの方向からこの課題に現在アプローチしている。それを紹介しよう。

①日本語による「古典籍総合目録DB」に対して、多言語による情報アクセスを可能とするシステムの開発

本研究では、これを実現するための実験システムとして、立命館大学アート・リサーチセンターで公開されている「ARC古典籍DB」および「ARC浮世絵DB」を対象としたDB横断検索システ

ムを構築し、インターネット上で公開しつつ、開発をすすめている
(<http://www.dljsritsumei.ac.jp/fessu/>)。

本システムでは、海外の研究者による人文系DBの利用を支援することを目的として、漢字仮名交じりの日本語の書誌情報(資料名・編著者名など)の自動ローマ字化を行っている。資料名の読みをローマ字に変換する際に、特に長い資料名の場合には、適切な箇所に空白を挿入しなければ非常に読みづらいものとなる。このために、形態素解析器および日本語辞書を用いた手法により、単語の区切りと考えられる部分に空白を挿入する手法を開発している。まだ精度には改善の余地があるが、資料名の自動ローマ字化の精度向上に向けた一定の見通しが得られている。本システムは、現在進められている画像へのアノテーションに対しても機能するものであり、汎用性が高い。

また、データベース中の資料に対して、それに関連する国内外の外部データベースの資料へのリンクを自動的に生成する手法を検討している。具体的には、書誌情報に含まれる単語の意味的な類似度を用いて、同言語あるいは異言語のデータベースから関連レコードを同定する手法を開発している。この手法の実現により、本DBに収載されている資料と関連する、国内外の所蔵機関に所蔵される資料の発見やアクセスの効率化に繋がることが期待できる。

②英語解説編集機能による英語解説の蓄積と英語による内容検索の実現

本研究では、「A R C古典籍ポータルDB」(http://www.dh-jac.net/db1/books/search_portal.php)を実験システムとして位置づけ、日英両言語の検索システムで共通して必要な書誌情報について、用語を英語化し英語インターフェイスによる検索を実現している。一方、日本語版では必要ないが、英語版データベースには必要と思われる記述項目を、タイトル(別称を含む)のローマナイズ、英訳タイトル(内容による)、タイトルの英訳別案、英語内容解説と定め、オンラインでの編集可能項目として設定し、それらを編集可能項目とした。

これらシステム更新によってデータベースに海外の若手研究者らがクラウドソーシング型で情報蓄積できる環境を整えた。それと同時に、情報蓄積のために日本語による参考資料情報群を用意し、そこから知識や知見を獲得することで容易に記述が可能な研究環境を整えている。海外若手研究者の教育用WEB環境を作ることで、DBの情報蓄積を実現するという手法である。

ここで蓄積された解説データは、直接の検索対象となるため、題名や著者名などの単にローマ字化された用語の検索だけでなく、内容検索に踏込んだDBが実現できるのである。加えて、古典籍そのものに興味を持つ海外研究者の育成に貢献できるシステムに成長させることも重要な役割と考えている。

「津軽デジタル風土記の構築」に向けて

弘前大学(教育学部・人文社会科学部)と国文学研究資料館(以下「国文研」と略記)による異分野融合共同研究「津軽デジタル風土記の構築」が平成二十九年度から三年計画で始まった。歴史的典籍から抽出される文化・歴史・産業などの幅広い地域情報をデジタル空間において体系的に連結し、新たな地域の価値の創出や再発見につなげていこうとするものであり、津軽地域を対象とした全国に先駆けたモデル事業である。新日本古典籍総合データベースの活用、及び文献観光資源学の一環としても位置づけられている。

時宜を得た共同研究

周知のように、国文研には津軽家から引継がれた約三千五百点に及ぶ「津軽家文書」が所蔵されているが、これらを用いた自治体史編纂が、今年度で一つの区切りを迎える。『新編弘前市史』『新青森市史』等の市町村史がここ数年の間に完成し、これらを後押ししてきた『青森県史』が今年度で終了するからだ。何れも資料の調査・収集に重点を置いて編纂されたものであり、『青森県史』も全三六巻の内、資料編等が三三巻を占めている。

このような中、調査・収集した資料について、デジタル化による保存・活用・公開への動きが出てきている。特に青森県と弘前市の取組は、歴史資料を地域資源、観光資源としても活用していこうとする方向性をもち、各種関連情報を体系的・総合的に連結するシステムの構築をも目指したものとなっている。今回の共同研究はこ

のような状況の中で始められることになったのであり、研究者、一般市民ともに歓迎すべきものであった。

本共同研究推進にあたり、主要な資料所蔵機関の設置主体である青森県(青森県立郷土館)と弘前市(弘前市立図書館、同博物館)が、主体的に「文献観光資源学『津軽デジタル風土記の構築』プロジェクト推進に関する覚書」の締結に加わったのもそのためであつた。覚書の締結を記念し、ロバート

キャンベル館長、長谷川成一弘前大学名誉教授を迎えて開催した講演会「津軽の魅力と文化を世界に発信!—古典籍・歴史資料のデジタル公開に向けて—」では二五〇人もの参加者があり、市民の関心の高さを実感した。



左から今井弘前大学人文社会科学部長、戸塚同教育学部長、キャンベル国文研館長、佐々木弘前市教育長、山田青森県立郷土館長の5者による「覚書」の締結(平成29年7月15日)

弘前大学大学院教育学研究科 教授
(異分野融合共同研究 研究代表者)

瀧本 たきもと

壽史 ひさふみ

コンセプトは「本州最北端」

太宰治は津軽半島の龍飛崎に至り「ここは本州の極地である。この部落を過ぎて路は無い。あとは海にころげ落ちるばかりだ。」(『津軽』)と書いた。津軽海峡によって分断された津軽は、行き止まりの地、文化果つる地であるという認識の存在は否定できない。しかし一方で、津軽は近世四つの口の一つである「松前口」への渡航



「北狄の押へ」という弘前藩のアイデンティティを形成した弘前藩官選史書「津軽一統志」(享保16(1731)年、弘前市立図書館蔵)。写本が数多く残る。藩士の子どもが手習いとして筆写したものも確認できる。

地であり、北方世界への出発点でもあった。人と人とを結び付ける海の機能もまた否定することはできない。この「行き止まり」と「出発点」の世界の中に津軽があったのであり、津軽の自然と向き合う人々の生活があったのである。その意味で、「本州最北端の風土記」なのであり、「本州最北端に生きた人々」をコンセプトとして資料の選定を行い、デジタル化を進めている。

大きな枠組みとして「津軽・北の思想と言説世界」「津軽・北の自然と生活世界」の二つを置き、この枠組みが相互に関係し合っていることを踏まえながら、前者の中に①藩主・藩士の知②学問と文芸③歴史編纂④生活の知、後者の中に⑤生活の記録と図絵⑥信仰と宗教⑦祭礼と芸能⑧自然災害と飢饉の各四つのテーマを設定した。

なお、各資料情報をデジタル空間において連結する汎用ツールの開発については、国文研のこれまでの研究の蓄積に学んでいきたいと考えている。



津軽アイヌに探索・捕獲を命じた珍鳥ウトウ(「善知鳥図」『津軽図譜』百川学庵筆、19世紀初、青森県立郷土館蔵)

「古代の甘味料」あまつら“の復元”

―文と理の知恵の蔓を綱い交ぜて―

日本料理は、近年ますます世界中の人々から注目されるようになりました。そのせいか、海外旅行先で、Washoku に出会う機会も増えました。外国人の手による新たな「日本料理」には、風変わりなものもありますが、あらためて日本料理とは何かを考えさせてくれます。あるいは Washoku は今後、日本にも普及し、日本料理を容させるかもしれません。

現代の日本料理も様々な変革の歴史を経てきました。その途中で消えてしまった料理や調味料もあります。あまつらもその一つです。およそ六百年前まで日本では砂糖はたいへん希少なものでした。そのため、料理やお菓子の甘味は水飴かあまつらを用いていました。あまつらは「枕草子」や「源氏物語」など平安時代の書物に多くの記述が残ることから、古代の貴族階級に欠かせぬものであったことがうかがえます。ところが室町時代に入り、砂糖が量産されると、あまつらは姿を消し、忘れ去られてしまいました。

国文学研究資料館と立命館大学の異分野融合共同研究「料理・調味料の復元と活用に関する研究」は、あまつらの復元に向けた研究を進めています。日本現存する最古の本草書とされる『本草和名』（延喜十八（九一八）年ごろ）に、あまつらは千歳薬（せんざいやくい）というつる性樹木の汁（樹液）と記されていますが、千歳薬にあたる植物に諸説ありよくわかっていません。明治から昭和期の植物学者白井光太郎

立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 助教
（異分野融合共同研究 研究代表者）
神松 幸弘

は、諸説を整理し、紀州の畔田翠山の著した『古名録』（寛政十二〔一八〇〇〕年）にある、阿末都良は地錦の莖に溜まれる甘汁なりという説を支持し、ツタ樹液が高濃度の糖分を含むことを証明しました。以降、あまつらはツタの樹液を煮詰めたというのが通説です。しかし、白井論文を読むと、翠山以外の諸説を棄却する論拠は意外なほど説得力に欠け、糖分分析もツタ以外の植物では行われていません。

私たちは、あまつらに関する既知の文献を読み直したり、未知の古典籍を探索したり、原料の候補となる植物の樹液の化学分析をしています。



図1 『甘葛考』(写本)に収蔵されているブドウ科の1種。
国立国会図書館蔵 DOI:10.11501/9892539
URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892539>
請求記号 W392-N15 コマ番号21



写真1 大台ヶ原山中で樹液採集をする筆者ら(撮影:入口敦志准教授)

文献には仮名くずし字の書物もあります。専門外の者にとってくずし字は大きな障壁であり、国文学研究者との協働は必須です。そこで国文研の入口敦志先生にくずし字の翻字をしていただいております。阿波の藤原清香が著した『甘葛考』(天保十「一八四〇」年)の翻字から、いくつか驚くべき事実が明らかになりました。その成果の一つ、『甘葛考』で清香が原料植物と考えた種は、後に白井が清香の説として紹介した種と一致しないことを確認しました。白井は論文中で『甘葛考』を「真を得たるものに非ず」と一蹴しますが、なぜ、白井は読み誤ったのでしょうか。一つの仮説ですが、

『甘葛考』は仮名くずし字で書かれた散文調の短いレポートです。

一方、翠山の『古名録』は漢文体の大事典です。漢字・カタカナ・ひらがなと表記の違いによって、書物にも身分や階層など社会的背景が宿るというのは入口先生の受

け売りですが、格式ある典籍に比べて仮名書きの『甘葛考』は軽視された可能性があります。だとすれば、他のくずし字の本草書も確認すべき情報が未だ多く眠っているかもしれません。このように書かれた内容のみならず、背景にある思想や社会まで視野を広げることができたのは、異分野の協働あつてのことだと思えます。学際研究は、異なる視点を持ち寄るいわば、「メガネの貸し借り」で、ときに予想もしなかった展開に醍醐味を味わうこともあります。

入口先生には、植物専門家の先導する植物調査にも同行していただきました。降りしきる雪の中、大台ヶ原山中での採集作業は手がかじかむほど冷たかったのですが、多くの植物から樹液を採取できました。高速液クロマトグラフィーによる糖分分析の結果、高濃度の糖分を含む種がツタ以外に複数見つかりました。結果の詳細は、第3回日本語の歴史的典籍国際研究集会にて発表いたしました。

研究集会では、多くの研究者から実際にあまつらを食味してみたいとご意見をいただきました。あまつらの味は、きつと文字だけでは分からない時代の感覚や記憶を私たちに呼び起こしてくれることでしょう。「あてなるもの」と清少納言が愛したかき氷や、紫式部が宇治十帖の中で薫の君に持たせた菓子「ふずく」をあまつらで再現し、たくさんの方と古典籍の世界を体感できるよう「復元」に取組んで参りたいと存じます。

引用文献

- (1) 白井光太郎「史的天然記念物甘葛煎の基本植物について」『史跡名勝天然記念物』第3集11号p.1-16 1982
- (2) 入口敦志『漢字・カタカナ・ひらがな 表記の思想』平凡社 2016

イベント報告一・二

歴史的典籍NW事業では、市民の皆様や、海外の研究者に向けて、事業のあらましやこれまでの研究成果をお伝えするために様々なイベントを実施しています。そのなかから二点をご紹介します。

1 ポルトガルで当事業や研究成果を紹介

ポルトガル・リスボンにおいて開催されたE A J S（ヨーロッパ日本研究協会）の大会に併せ、八月三十日にリスボン新大学において、「日本語の歴史的典籍と研究の近未来」と題したプレイベントを主催しました。当事業がスタートして四年となりますが、こうし



プレイベント光景

た催しを欧州で開催するのは初めてのことです。当館からは齋藤・海野・ダヴァン・山本の四名が登壇。国語研の高田智和先生、CODHの北本朝展先生、慶應義塾大学の佐々木孝浩先生にご協力をたまわり、予想を上回る研究者の方々が来聴されました。齋藤教授による「デジタル画

像がひらく物語絵研究」では、ウェブ公開されたばかりの奈良絵本『御曹子島渡り』三巻（いけのや文庫）も紹介されるなど、研究の最前線を提示することが出来たと思います。フロアとの意見交換も活発になされ、今後の海外展開に弾みがつきそうです。

2 三越伊勢丹とのコラボによる「江戸の味」再現

九月二十日から二週間、(株)三越伊勢丹の日本橋三越本店、銀座三越でおこなわれた江戸料理の再現、アレンジキャンペーンに協力し、『万宝料理秘密箱』など江戸時代の料理本をもとに、老舗名店が再現した料理について、原本画像を用い、その翻刻、現代語訳、解説等を行い、料理一品一品に添えられるレシピとして各店舗で配付されました。併せて当館所蔵の江戸料理本を展示するなど、これまでにない試みでした。二三日には山本副センター長が、小規模のセ



セミナー光景

ミナーを実施。今回の企画は大変評判もよく、定番商品になった料理もあったそうです。

こんな古典籍があった！～拠点大学古典籍画像紹介～

歴史的典籍NW事業では、二〇一五年度から、拠点大学における古典籍の撮影を実施しています。新日本古典籍総合データベースで公開された古典籍から、各大学おすすめの一点をご紹介します。

●北海道大学附属図書館所蔵『龍水直写 魚づくし(りゅうすいちよくしやうおづくし)』勝間龍水画、宝暦十二年(一七六二年)

北海道帝国大学の前身「東北帝国大学農科大学図書館」時代に受け入れた絵入りの俳諧書。国内他館にも所蔵があるが題簽の書名が異なる。木版多色摺りで、うろこには雲母まで使われている。魚の名前と別名、その魚にちなんだ俳諧が紹介され、ユーモラスでいきいきとした絵が魅力。本学購入以来、綴じを修繕した形跡はないが、他館資料と比較したところ「初」の丁(ページ)の順序が一部入れ替わっていることが判明した。これもデジタル化の恩恵であろう。



DOI: <https://doi.org/10.20730/100260146>

●奈良女子大学学術情報センター所蔵『南北二京霊地集(なんぼくにきょうれいちしゅう)』良定著、書写年不詳

若き日に琉球に渡った僧袋中(法諱良定)が、奈良と京都の社寺について記した著。版本で知られ、ゆかりの西寿寺には、袋中自筆の写本も残る。奈良女本は、存在が知られる二点目の写本ということになるが、実は版本の忠実な写し。字配りも版本に同じく、柱書きや丁数記入等も全巻に及ぶ。しかし版本の出た晩年、袋中は奈良近くで修行生活を送っており、どんな人がどんな思いで、版本を隅々まで写し取って手元に置いたか考えると、そこに袋中への深い思慕の念を感じる。



DOI: <https://doi.org/10.20730/100258942>

※画像の転載や翻刻掲載などを希望される場合は、利用条件のページ(<https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/usage.html>)を必ずご確認ください。

日本古典籍のポータルサイト
公開「ふみ」第八号
で紹介した「新

日本古典籍総合データベース」が十月二七日(金)に正式公開されました。同日、国文学研究資料館大会議室(立川市)において、記者会見を開催しました。ロバートキャンベル館長から本データベースが社会に対して担う役割について説明がありました。十月現在で約七万点の画像を公開しています。本データベースの基本的な機能を紹介したパンフレットも用意しておりますので、クイックガイドとしてもご利用ください(QRコード参照)。

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>



イベント開催予定

■「『古典』オーロラハンター3」

「日時」平成三十(二〇一八)年二月十八日(日)

十三時三〇分～十六時三〇分

「会場」国文学研究資料館 大会議室

(東京都立川市緑町十一三)

「主催」人間文化研究機構 国文学研究資料館

イベント報告

■第十九回図書館総合展

十一月七日(火)～九日(木)にパシフィコ横浜で開催された「第十九回図書館総合展」に国文研として



コミュニケーション・ブースに初出展し、新日本古典籍総合データベースの紹介と古典籍の展示を行いました。三日間で約八〇〇名がブースを訪れました。

■歴史的典籍オープンデータワークショップ
十二月八日(金)に大阪市立大学文化交流センターにおいて「歴史的典籍オープンデータワークショップ」切ったり貼ったり、古典籍からなにを取り出そう?」を開催しました。古典籍画像や技術を活かしたキュレーションサイトの展開例について様々なアイデアが提案されました。



海外における情報発信

■九月十五日(金)にノルウェーのオスロ大学で開催された「The 28th EAJRS Conference」において、「国文学研究資料館『新日本古典籍総合データベース』について」と題した紹介を行いました。

■十二月七日(木)にフランスのパリ・ディドロ大学において「異分野融合による『総合書物学』の構築」プロジェクトの代表者である谷川教授が「国文学と文献学と philology」20世紀前半における日本の文学研究」と題した発表を行いました。

協定書・覚書の締結

◆情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設(協定書 五月一〇日)

◆茨城大学地球変動適応科学研究機関(協定書 五月三十一日)

◆「津軽デジタル風土記の構築」プロジェクトの推進に関する覚書(国文学研究資料館・弘前大学教育学部・弘前大学人文社会科学部・青森県立郷土館・弘前市教育委員会の五者による覚書 七月十五日)

ふみ 第10号は、
平成30(2018)年
6月発行予定です。

■表題の背景色は松葉色(まつばいろ)です。この色には長寿と繁栄が込められており、平安時代に書かれた枕草子に出てきます。古代から松は神が下りてくる、不老不死の象徴でめでたい樹とされており「待つ」から転じたという説が有力です。

■本誌「ふみ」各頁の背景は当資料館蔵の「方丈記」(本阿弥光悦流の書体を模刻した嵯峨本)を利用しています。

■表題「ふみ」の書体は、石川島造船所(現IHI)創業者の平野富二が明治十二年六月に刊行し当館所蔵の「BOOK OF SPECIMENS」(活版印刷見本帳)を利用しています。

ふみ

「日本語の歴史的典籍の
国際共同研究ネットワーク
構築計画」ニューズレター
第9号

〈発行日〉

平成30(2018)年1月15日

〈編集・発行〉

国文学研究資料館

古典籍共同研究事業センター

〒190-0014

東京都立川市緑町十一三

TEL 050-5533-2988

FAX 042-526-8883

<http://www.nijl.ac.jp/pages/cjproject/>



大判錦絵「擬五行尽之内」松若丸・清玄尼がご覧になれます。携帯電話又はスマートフォンのアプリ等で、左記のQRコードを読み取りご覧ください。

【お詫びと訂正】

ふみ第9号2018年1月発行 神松 幸弘 先生に御執筆いただきました『「古代の甘味料”あまつら”の復元」一文と理の知恵の蔓^{かずら}を^な緋^まい交ぜて一』において、誤りがありました。ここに謹んでお詫び申し上げますと共に、下記のように訂正いたします。

正 誤 表

訂正箇所	誤	正
8 ページ上段 左から3行目	^{せんざんるい} 千歳蘂	^{せんざいるい} 千歳蘂

国文学研究資料館

古典籍共同研究事業センター